

## 2025年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
経営学部	教授	深谷和広
最終学歴	学位	専門分野
立命館大学大学院経営学研究科企業経営専攻博士後 期課程満期退学	経済学修士	会計学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

「三つの言葉」(建学の精神／校訓／教職員の心構え)並びに「オンリーワンを、一人に、ひとつ。」のブランドコンセプトを、教育・研究・大学運営・社会活動における諸活動の理念とする。

##### 【目標】

経営に必要な知識と技術を修得させ、地域で事業活動を行う企業や組織においてリーダーシップを発揮し、活躍できる人材の育成を目標とする。

##### 【方針】

簿記会計、会計学、財務諸表論などの財務会計の分野の学習を通じて専門知識を身に付けた人材を育成する。また、「オンリーワンを、一人に、ひとつ」の理念のもと魅力ある社会で活躍できる人材育成する諸活動に邁進する。

##### 【計画（方法）】

校訓「真面目」を強く意識し、学習活動への真面目な取組みの基本姿勢を伝える。また学習内容に興味のわく分かりやすい授業実践を進める。また演習では、学生の主体的な学びを前提とし、愛情と情熱をもって魅力ある社会で活躍できる人材育成を実践する。

#### ○担当科目（前期・後期）

##### （前期）

会計学入門、会計学、原価計算論、基礎演習Ⅰ、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

##### （後期）

簿記会計Ⅱ、財務諸表論、基礎演習Ⅱ、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

#### ○教育方法の実践

2020年4月コロナ禍以来5年が経過した。学部としては対面とメディアの二つの方式を駆使して効果的な授業内容の実現を図った。自身の担当科目では、対面授業のメリットを生かして魅力的な授業となるように努めた。また学生の理解度を常に意識し、授業内容の理解を深めるため板書とネット資料を駆使して授業内容の効率化を図った。演習科目では、授業内での学生相互のコミュニケーションを意識し、アクティブな演習運営に取り組んだ。また演習活動を通じて学生相互のチームワークを高める努力を行った。

#### ○作成した教科書・教材

「会計学入門」「簿記会計Ⅱ」「原価計算論」「会計学」「財務諸表論」のそれぞれの科目で独自の学習資料を作成し、学生の理解度を踏まえ、学生にとって興味のわく授業内容となるように授業運営に努めた。フィードバック資料提供のためにチームス資料機能を活用した。またチームスの課題機能で、適宜理解を深める課題を課すなど自主学習を進めるように授業運営に努めた。

#### ○自己評価

「会計学入門」「簿記会計Ⅱ」「原価計算論」「会計学」「財務諸表論」のそれぞれの科目で独自の学習資料を作成し、学生の理解度を踏まえ、学生にとって興味のわく授業内容となるように授業運営に努めた。フィードバック資料提供のためにチームス資料機能を活用した。またチームスの課題機能で、適宜理解を深める課題を課すなど自主学習を進めるように授業運営に努めた。

## II 研究活動

#### ○研究課題

我が国の次世代の企業会計制度を見据えた英国会計制度の在り方の研究

#### ○目標・計画

##### 【目標】

次世代の企業会計制度の在り方を探る。この研究活動を通じて、次世代の人材育成に資する大学教育に大きく貢献する。また、担当科目の授業において、これまでの研究成果を積極的に学生に伝達する。

##### 【計画】

IFRS 会計基準における表示・開示の問題に注目して積極的に研究活動に取り組む。1年間の研究計画としては主に以下の3つの視点を意識して取り組む。

- 次世代の企業会計制度・会計基準文献調査及びその研究を通じ、その特徴点を把握する。
- 次世代の企業会計実務について文献調査及び研究を通じ、その特徴点を把握する。
- 上記の調査研究を通じて我が国の企業会計制度への示唆となる点を明らかにする。

#### ○2018年4月から2026年3月の研究業績（特許等を含む）

（著書）

（学術論文）

- ・深谷和広：「IFRS18「財務諸表における表示及び開示」へのイントロダクションー基本財務諸表プロジェクトの帰結ー」、同志社商学第75巻第5号、2024年3月14日、107頁-122頁
- ・深谷和広：「IASB基本財務諸表プロジェクトの予備的検討ーEBITと経営者業績指標の導入の方向性ー」、東邦学誌第47巻第1号、2018年6月10日、145頁-157頁

（学会発表）

該当なし

（特許）

該当なし

（その他）

該当なし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

科学研究費補助金への申請は行わなかった

○所属学会

日本会計研究学会、税務会計研究学会、国際会計研究学会、会計理論研究学会

○自己評価

2025年は、次世代の企業会計制度および会計実務の文献調査及びその研究を通じて、現状把握の調査研究を進めてきた。主に、IFRS 財務会計基準の改善を意識したトピックに注目し、その会計基準の生成過程から現行の企業会計制度への影響に注目して文献研究を行った。本年度の研究対象として、国際会計基準が取り組む「企業結合」、「キャッシュ・フロー計算書」のプロジェクトに注目した。本年度の研究成果はその途上の過程を理解する重要なプロセスであった。残念ながら、本年度の研究成果は論文として公表することはできなかった。次年度はこれまでの研究成果を論文として公表したい。またゼミや担当科目を通じて本学の教育活動に反映したい。

### Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

建学の精神を意識し、「真面目」に情熱をもって学務分掌の職責をはたし、大学運営に貢献する。「オンリーワンを、一人に、ひとつ」のフレーズを大学運営に反映する。

【計画】

学部長補佐並びに地域ビジネス学科長として大学・学部業務を推進する。特に、25年度学部学科新設に対応し、学部学科運営に邁進する。また所属委員会の構成員として担当業務を遂行し、大学の発展に寄与する。

○学内委員等

前期：人事委員会、自己点検・評価委員会、保健・学生相談センター運営委員、人権問題委員会相談員、教学法人協議会

後期：人事委員会、保健・学生相談センター運営委員、人権問題委員会相談員、教学法人協議会

○自己評価

本年度当初は学部長補佐・学科長として経営学部長を補佐する立場であったが、5月より休職のため田村学部長に代わり、また10月より学部長として、学部執行部の円滑な運営と学部教育の発展に資する活動に邁進してきた。新任の立場で学部長の役職の在り方に戸惑いながら、前向きに日常の業務に邁進した。また2025年度は経営学部新学科の初年度であり、新学科の運営にリーダーシップを発揮して積極的に関与し、学生募集活動においても不十分な点を自覚するものの、貢献することができた。学内委員としては、大学教育全体の発展に資する活動を積極的に行ってきた。

### Ⅳ 社会貢献

○目標・計画

【目標】

2025年度愛知大学野球連盟の理事として連盟活動に関与し、連盟の発展に貢献する。

【計画】

2025年度の事業計画に基づき、春秋リーグ戦の事業を運営し、魅力ある大学野球を実現する。

春秋リーグ戦の活躍を通じて大学野球の魅力を発信し、愛知東邦大学の魅力向上に貢献する。

○学会活動等

該当なし

○地域連携・社会貢献等

愛知大学野球連盟理事

○自己評価

硬式野球部長として大学を代表する硬式野球部となるべく部活動の運営に尽力し、本学学生活動全体の支援となるべく活動を推進した。本年度5月から病気治療の休職のため田村学部長に代わり学部長業務を担い、10月から経営学部長に就任した。12月時点で硬式野球部長を後任の杉谷と交代した。15年間の硬式野球部長の職務を果たすことができた。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

「三つの言葉」と「コンセプトフレーズ」の理念を日々の業務の中心に置き、教育研究と学務の活動を通じて自己研鑽に邁進する。一人一人の学生の成長を支援する教育者として自己の潜在能力を発揮する。事業計画を念頭に、1年間の教育実践を遂行する。

VI 総括

大学教員として、教育・研究活動を中心として、2025年度も教育・学生指導の両面で年間計画のもとに積極的に日々の業務に邁進してきた。1年を振り返ると不十分な点もあったが、大学全体の発展と学生一人一人の成長に貢献し、大学発展の基礎固めとなる業務活動を実践することができた。なお、本年度は5月から田村学部長が病気治療に専念し、休職することになったことから、学部長補佐として学部長に代理として業務を遂行した。また、11月から経営学部長に就任し、学部運営業務を担当することになった。学部長として運営と学部教育活動の推進の両面で大学の教育活動に貢献することができた。また大学硬式野球部部長として強化指定クラブ運営・推進の業務を担当し、野球部部員一人一人の成長に資する活動ができた。愛知大学野球連盟理事の役割を連盟活動において果たすことができた。学部長に就任することに伴い、硬式野球部部長を後任の杉谷と交代した。

以上